平成３年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

天　神　前　遺　跡

１９９２

埼玉県熊谷市教育委員会

序　文

熊谷市は埼玉県北部の中核都市であり、歴史的にもゆかりのある土地であります。石原地区は、市域の中央部にあたり、江戸時代には熊谷宿に隣接し、中山道や秩父往還など主要な道が通っておりました。また、多くの古墳の存在が知られ、古代から多くの人々が生活の地としてきたことがうかがわれます。

当地区の古墳は、かつて四八塚と称され、市内でも最も密集した古墳群を形成しておりました。残念ながら現在では、墳丘を残す古墳は数基確認できるのみとなっています。

本市教育委員会は、大和興業株式会社から委託を受けて、資材置場建設予定地の発掘調査を実施しました。

遺跡は、重要な文化遺産として、後世に残すことが第一に計られるべきですが、工事の性格上やむをえず、記録保存の方策をとることとなりました。

本書は、平成２年度に実施された天神前遺跡の発掘調査の成果をまとめて報告するものです。

発掘調査によって得られた資料は、重要な文化遺産として、学術研究、学校や社会教育に資するものであると考えます。こうした、調査・報告を契機として、多くの市民の方々が、埋蔵文化財保護について、より一層のご理解とご協力くださることを願ってやみません。

最後になりましたが、県文化財保護課、大和興業株式会社、ならびに地元石原地区の方々を初め、多くの方々からご指導・ご協力をいただきましたことに対して、深く感謝の意を表します。

平成４年３月

熊谷市教育委員会
教育長　関根幸夫

例　　言

1．本書は、埼玉県熊谷市大字石原字天神前1208－1他に所在する天神前遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、資材置場の建設に伴う事前記録保存のための発掘調査である。

3．発掘調査及び整理、報告書作成期間は、下記のとおりである。

　発掘調査期間　平成2年10月1日～平成2年12月11日。

　整理、報告書作成期間　平成3年4月1日～平成4年3月31日。

4．発掘調査は、熊谷市教育委員会・吉野　健が担当し、本書の執筆・編集は、同・権田宣行が担当した。

5．発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体者	熊谷市教育委員会教育長			関根幸夫
調査担当者	熊谷市教育委員会社会教育課主事			吉野　健（平成2年度）
	〃	〃	〃	権田宣行（平成3年度）
事務局	〃	〃	課長	高田普通
	〃	〃	課長補佐	岡田伸洋（平成2年度）
	〃	〃	〃	翠田晴夫（平成3年度）
	〃	〃	係長	金子正之

6．本書中、出土遺物実測図の中心線は、遺物を回転させず実測したもの：実線、180度回転させたもの：一点鎖線というように区別している。

7．遺構図の中で、溝はM、トレンチはT、河原石はS、遺物の位置図の中で、鉄製品は▲、埴輪は■と記号化した。

8．遺構図と写真図版の遺物の番号は、挿図番号を示す。例えば1－2は第1図の2の遺物をさす。

9．出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

10．発掘調査及び整理作業の参加者は以下のとおりである（敬称略，五十音順）。

　秋山せつ、新井恵美子、小川信子、片桐節子、片桐敏治、片野喜久、木曽富美子、草間サキ、小林シズ、清水真利子、関口由美子、高橋昌子、土屋ゆき子、鶴田文子、長島実千代、並木弘美、広橋みち子、福島隆子、松田良子、茂木恵美子、湯沢　幸、渡部キヌ子。

11．本書の作成にあたって、埼玉県鴻巣市教育委員会・山崎　武氏、埼玉県上里町教育委員会・外尾常人氏に御教授を受けた。記して感謝いたします。

目　　次

序　　文 …… Ⅰ
例　　言 …… Ⅱ
目　　次 …… Ⅲ
挿図目次 …… Ⅲ
図版目次 …… Ⅲ
第 1 章　発掘調査に至るまでの経過 …… 1
第 2 章　遺跡の位置と環境 …… 1
第 3 章　発掘調査の経過 …… 4
第 4 章　遺跡の概観 …… 4
第 5 章　遺構と遺物 …… 9

挿　図　目　次

第1図　周辺遺跡分布図
第2図　天神前遺跡位置図
第3図　天神前遺跡全測図
第4図　1号古墳跡
第5図　1号古墳跡石室
第6図　1号古墳跡石室出土遺物
第7図　1号古墳跡周溝出土遺物
第8図　1号古墳跡出土一括遺物
第9図　1号溝跡
第10図　1号溝跡出土遺物
第11図　2・3・4号溝跡
第12図　2・3・4号溝跡土層断面図
第13図　2号溝跡出土遺物
第14図　3号溝跡出土遺物
第15図　1号集石遺構
第16図　天神前遺跡出土一括遺物

図　版　目　次

図版1－1. 1号古墳跡全景
2. 1号古墳跡石室
図版2－1. 1号古墳跡石室遺物出土状況
2. 1号古墳跡石室根石検出状況
3. 1号古墳跡石室掘方検出状況
4. 1号溝跡
5. 1号溝跡土層断面A－A'
6. 1号溝跡遺物出土状況1
2－7. 1号溝跡遺物出土状況2
図版3－1. 1号溝跡遺物出土状況3
2. 2・3号溝跡
3. 3・4号溝跡
4. 3号溝跡河原石出土状況
5. 1号集石遺構
6. 発掘調査風景
7. 発掘調査風景
図版4－1. 1号古墳跡石室出土遺物
2. 1号古墳跡周溝・1号溝跡出土遺物
図版5－1. 1号古墳跡出土一括遺物
2. 1号溝跡出土遺物
図版6－1. 2・3号溝跡出土遺物
2. 天神前遺跡出土一括遺物

第１章　発掘調査に至るまでの経過

平成元年10月23日、大和興業株式会社から熊谷市教育委員会に、資材置場及び駐車場予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会があった。これに対し熊谷市教育委員会から、平成元年11月１日付元熊教社発第755号で、開発予定地は遺跡の所在する可能性が非常に高く、試掘調査を必要とする旨回答がなされた。その後、熊谷市教育委員会は大和興業株式会社から、平成元年11月７日付の試掘調査依頼書により、埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査の依頼を受けた。これにより、平成元年11月30日、12月１日に試掘調査を実施したところ埋蔵文化財が確認され、その旨が大和興業株式会社へ平成元年12月11日付元熊教社収第812号で回答がなされた。その結果、熊谷市教育委員会と大和興業株式会社間で協議がもたれ、平成２年８月４日に埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結し、これにより熊谷市教育委員会が、調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成２年10月１日から開始された。

第２章　遺跡の位置と環境

熊谷市の地形は、大半が荒川左岸の沖積扇状地（熊谷扇状地）の低地と、利根川とその支流により形成された沖積地（妻沼低地）で、西縁と南縁が洪積扇状地の櫛挽台地と江南台地の末端にあたる。

天神前遺跡は、埼玉県熊谷市大字石原字天神前1208-1他に所在しており、ＪＲ高崎線熊谷駅の北西約2.8km、荒川から北へ約2.0kmの所に位置する。

天神前遺跡の所在する石原地区は、熊谷市の中央部にあたる。本遺跡は、熊谷扇状地に形成された自然堤防上に立地し、標高34～35ｍを測り、更地となっていた。本遺跡の北東側は１～２ｍ程下がっており、旧河道が走っていたと考えられる。

本遺跡の周辺において古墳時代の遺跡は、本遺跡の北西の別府地区に、前期の住居跡が検出されている横間栗遺跡や前期と後期の集落跡が検出されている根絡遺跡、湧水に対する祭祀を行ったと考えられている西別府祭祀遺跡がある。西別府祭祀遺跡からは、湯殿神社裏の湧水箇所から古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器片、滑石製模造品が多数発掘されている。

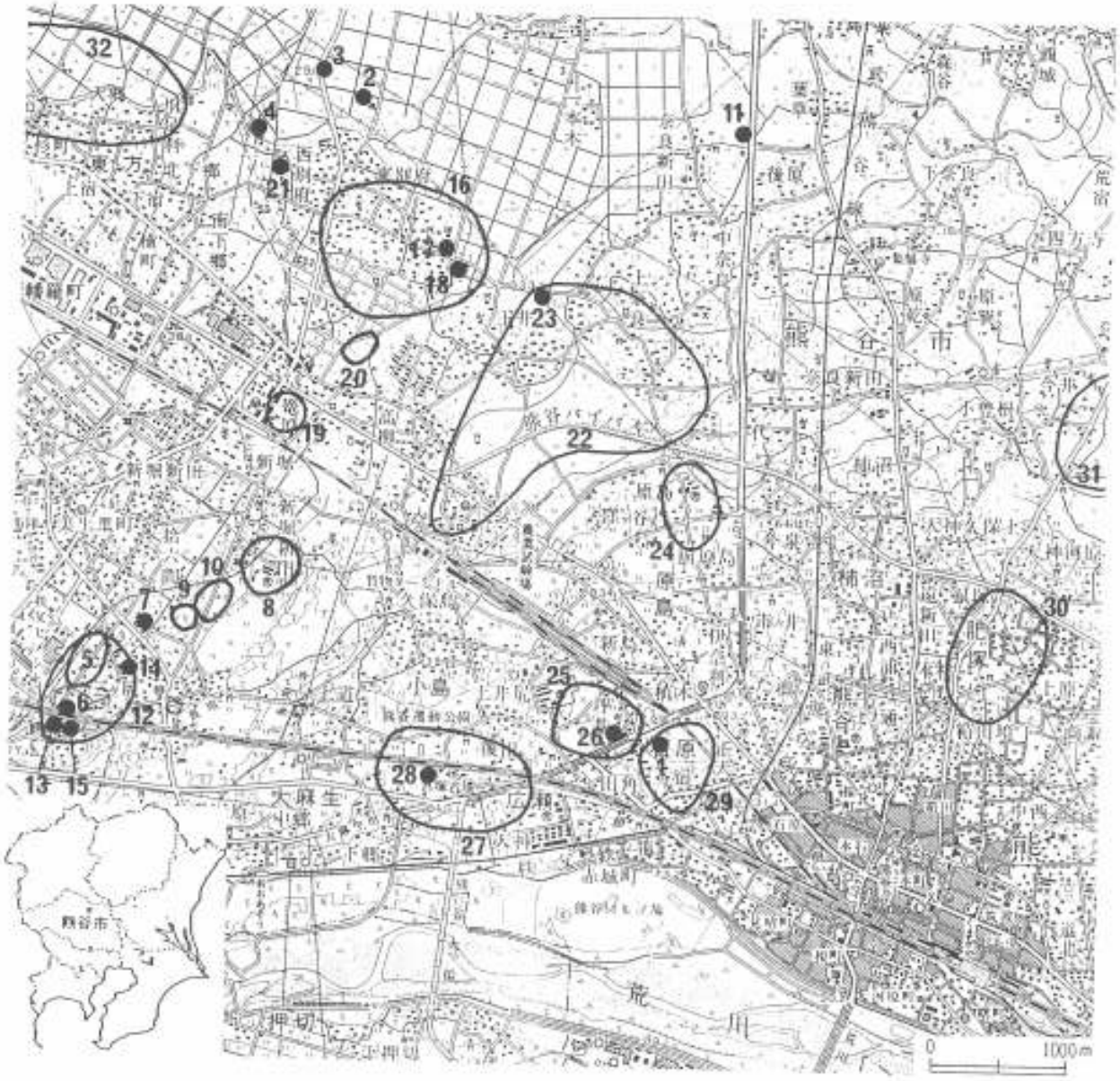
また、櫛挽台地の東端部の三ヶ尻地区に三ヶ尻天王遺跡、三ヶ尻林遺跡、三尻中学校遺跡があり、それらの遺跡の東側の熊谷扇状地上に樋ノ上遺跡、上辻・下辻遺跡がある。いずれも古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続的に集落が営まれたと考えられる遺跡である。

一方、古墳をみてみると、５世紀後半から末の頃には横塚山古墳が見られる。妻沼低地の福川の自然堤防上に立地する前方後円墳である。

古墳時代後期になると、多くの古墳群が形成される。櫛挽台地上に三ヶ尻古墳群、別府古墳群、籠原裏古墳群、在家古墳群が見られる。三ヶ尻古墳群は、現在58基の円墳と、「二子山古墳」と「運派塚古墳」の２基の前方後円墳が確認されている。昭和35年(1960)に１基の円墳が、昭和54・55年(1979 ・1980）に三ヶ尻天王遺跡と三ヶ尻林遺跡が、昭和54年(1979)に三尻№80古墳が各々調査され、河原石使用の胴張り型横穴式石室を有する古墳が存在する。別府古墳群は、現在16基の円墳と１基の前方後円墳が確認されている。昭和41年(1966)に仲郭古墳の調査が行われ円筒埴輪列の一部が検出された。ヤス塚古墳から農夫の埴輪が出土している。籠原裏古墳群は、昭和61年(1986)～平成元年(1989)にかけて４回の調査が行われ、８基の円墳と１基の八角墳が検出された。八角形の古墳は終末期の古墳の様相を考える上で、重要なものと考えられる。在家古墳群は、平成２・３年（1990・

1991)に調査され、6基の円墳が確認された。2基は河原石を用いた胴張型横穴式石室をもち、4基は河原石を用いた竪穴系の石室をもっていた。終末期の古墳と考えられ、籠原裏古墳群の八角形の墳丘をもつ古墳とともに西別府廃寺が構築される流れの中で注目される。

熊谷扇状地の自然堤防上に玉井古墳群、原島古墳群、坪井古墳群、広瀬古墳群、石原古墳群、肥塚古墳群、中条古墳群が見られる。玉井古墳群は、現在17基の円墳と2基の方墳が確認されている。昭和55年(1980)に新ヶ谷戸遺跡が調査され、1号墳は河原石使用の胴張り型横穴式石室を有する。原島古墳群は、現在3基の円墳が確認されている。坪井古墳群は、現在7基の円墳が確認されている。昭和47年(1972)に薬師堂古墳が調査され、控積



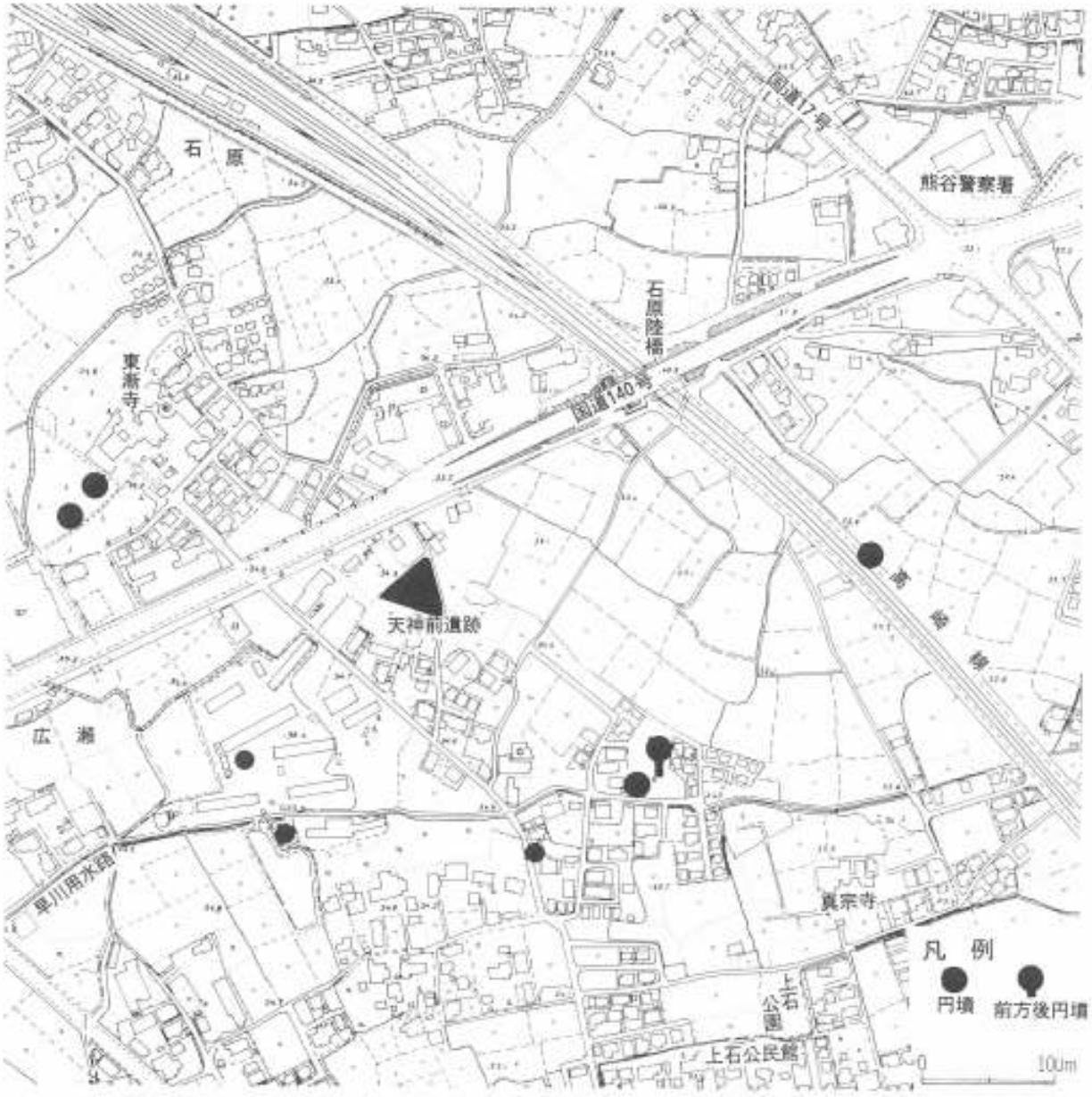
第1図　周辺遺跡分布図

1．天神前遺跡	2．横間栗遺跡	3．根絡遺跡	4．西別府祭祀遺跡	5．三ヶ尻天王遺跡
6．三ヶ尻林遺跡	7．三尻中学校遺跡	8．樋ノ上遺跡	9．上辻遺跡	10．下辻遺跡
11．横塚山古墳	12．三ヶ尻古墳群	13．二子山古墳	14．運派塚古墳	15．三尻No.80古墳
16．別府古墳群	17．仲郷古墳	18．ヤス塚古墳	19．籠原裏古墳群	20．在家古墳群
21．西別府廃寺跡	22．玉井古墳群	23．新ヶ谷戸遺跡	24．原島古墳群	25．坪井古墳群
26．薬師堂古墳	27．広瀬古墳群	28．宮塚古墳	29．石原古墳群	30．肥塚古墳群
31．中条古墳群	32．木の本古墳群			

を有する横穴式石室から銅釧、耳環、直刀、刀子、鉄鏃を得ている。広瀬古墳群は、上円下方墳である「宮塚古墳」の他、円墳８基、方墳２基が現在確認されている。石原古墳群は、かつて四八塚として多くの古墳が確認されていたが、現在は６基の円墳と１基の前方後円墳が確認されるにとどまる。天神前遺跡から検出された古墳跡も石原古墳群中に含まれる。熊谷市史前篇によると主体部の側壁に河原石を使用し、天井には緑泥片岩を用いていたという。肥塚古墳群は、現在13基の円墳が確認されている。角閃石安山岩を用いて石室を構築した古墳の存在が知られる。平成４年(1992)１月から３基の円墳が調査されている。中条古墳群は、現在21基の円墳と帆立貝式前方後円墳が２基確認されている。昭和54年(1979)～昭和57年(1982)、昭和59年(1984)には鎧塚古墳、権現山古墳、女塚古墳、大塚古墳が調査されている。

参考文献

小久保徹『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第23集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983
釼持和夫・木戸春夫「根絡遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和63年度　埼玉県教育委員会　1990
大場磐雄・小沢国平「新発見の祭祀遺跡」『史跡と美術』第338号　1963
寺社下博「三尻中学校遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度　埼玉県教育委員会　1982
金子正之『三尻遺跡群　黒沢館跡・櫨ノ上遺跡』熊谷市教育委員会　1985



第２図　天神前遺跡位置図

小川良祐他『樋ノ上遺跡－県立熊谷西高等学校関係埋蔵文化財調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第59集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1986
金子正之『三尻遺跡群　上壮・下壮遺跡』熊谷市教育委員会　1984
中村倉司『下壮遺跡－県道三ヶ尻新堀線関係埋蔵文化財調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第69集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1987
塩野博「荒川中流域沿岸の古墳について－横穴式石室の変遷－」『埼玉考古学論集　設立10周年記念論文集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991
利根川章彦他『新ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第９集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982
増田逸朗他『横塚山古墳』埼玉県遺跡調査会　1971
寺社下博「籠原裏遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和61年度　埼玉県教育委員会　1987
金子正之「籠原裏遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和62年度　埼玉県教育委員会　1989
小沢国平「別府古墳群（仲郷古墳）」『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅱ』　埼玉県教育委員会　1979
『新編　埼玉県史』資料編２　埼玉県　1982
『熊谷市史』　前篇　熊谷市　1963
吉野健『西方遺跡』熊谷市教育委員会　1990

第３章　発掘調査の経過

天神前遺跡は、資材置場の建設予定地にあたり、全面的に削平されることになるので、調査を実施した。建設予定地全体を調査区とし、重機により表土剥ぎを行った。１辺５ｍのグリット方式を用いて調査を行う為、北西隅をＡ－１として南へ１・２・３……、東へＡ・Ｂ・Ｃ……とし、Ａラインは、北から南へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３……と呼称した。Ｂライン以東もＡラインと同様に呼称しグリット設定を行った。

重機による表土剥ぎの後にも、人力によって表土剥ぎを行いながら精査を実施して、遺構確認を行った。古墳跡・溝跡・集石遺構が検出され、各遺構ごとに調査を行った。遺構ごとに手掘りを行い、出土した遺物は、写真撮影・実測をしたのち取り上げた。遺構も写真撮影・実測を実施した。最後に全体写真を撮影し、全測図の実測を行った。

本調査によって、古墳時代中期・後期の遺構・遺物が検出され、平成２年12月11日に現場での調査を終了した。

第４章　遺跡の概観

天神前遺跡は、熊谷市の中央部よりやや西にあたり、ＪＲ高崎線熊谷駅から北西へ約2.8km、荒川から北へ約2.0km、利根川から南へ約8.0kmに位置する。熊谷扇状地内の荒川左岸の自然堤防上に立地し、標高は34～35ｍを測る。

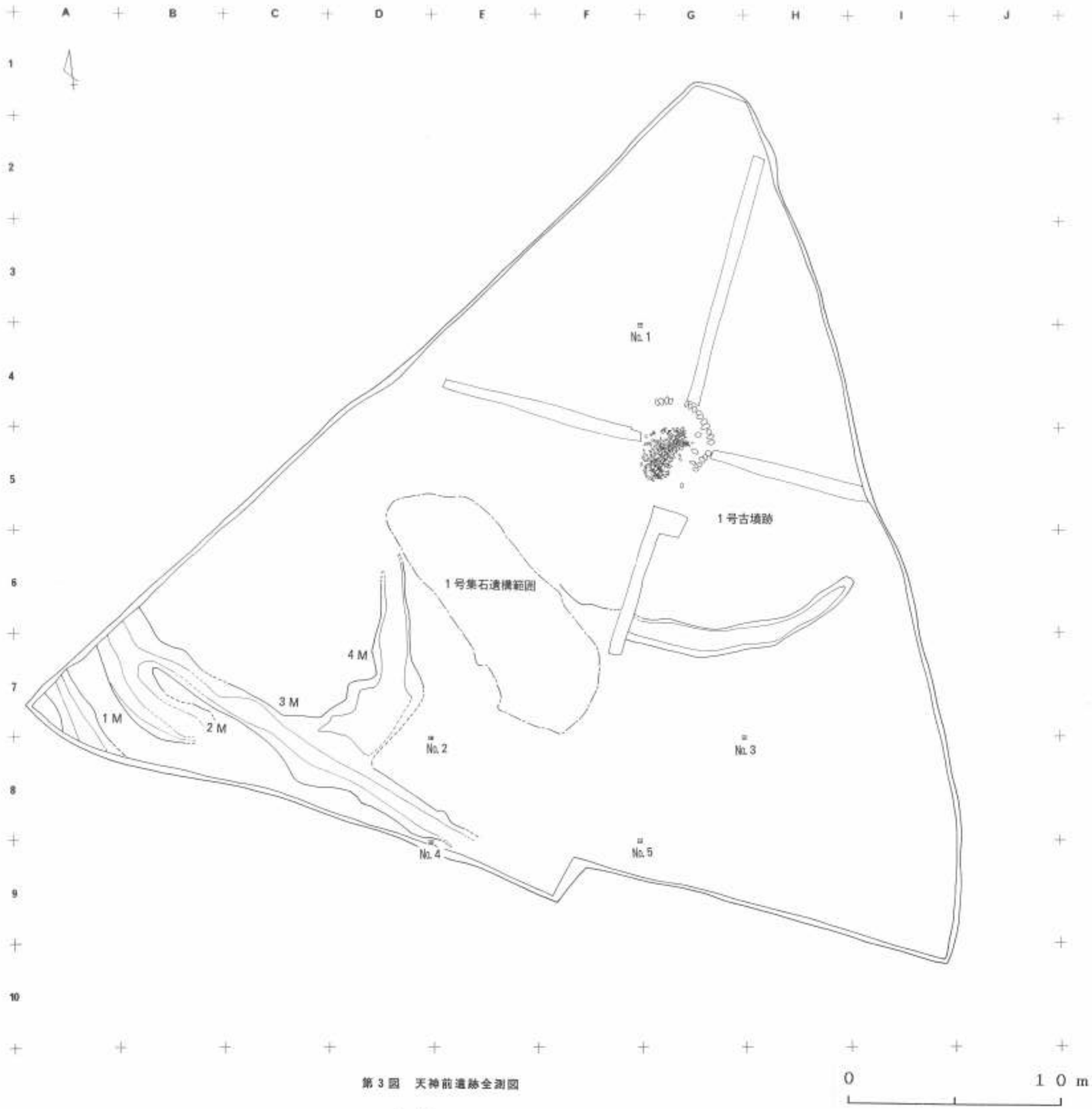
本遺跡は石原古墳群中に含まれ、今回の調査により、古墳跡が１基、溝跡が４条、集石遺溝が１基検出された。

古墳跡は著しく削平を受けており、横穴式石室の根石の一部が検出されるにとどまった。石室内からは、耳環、鉄製品の破片が検出された。周溝も一部検出されるにとどまり、ここからは形象埴輪の破片が出土している。石室の規模も墳丘の規模も正確に把握できる状態ではなかった。

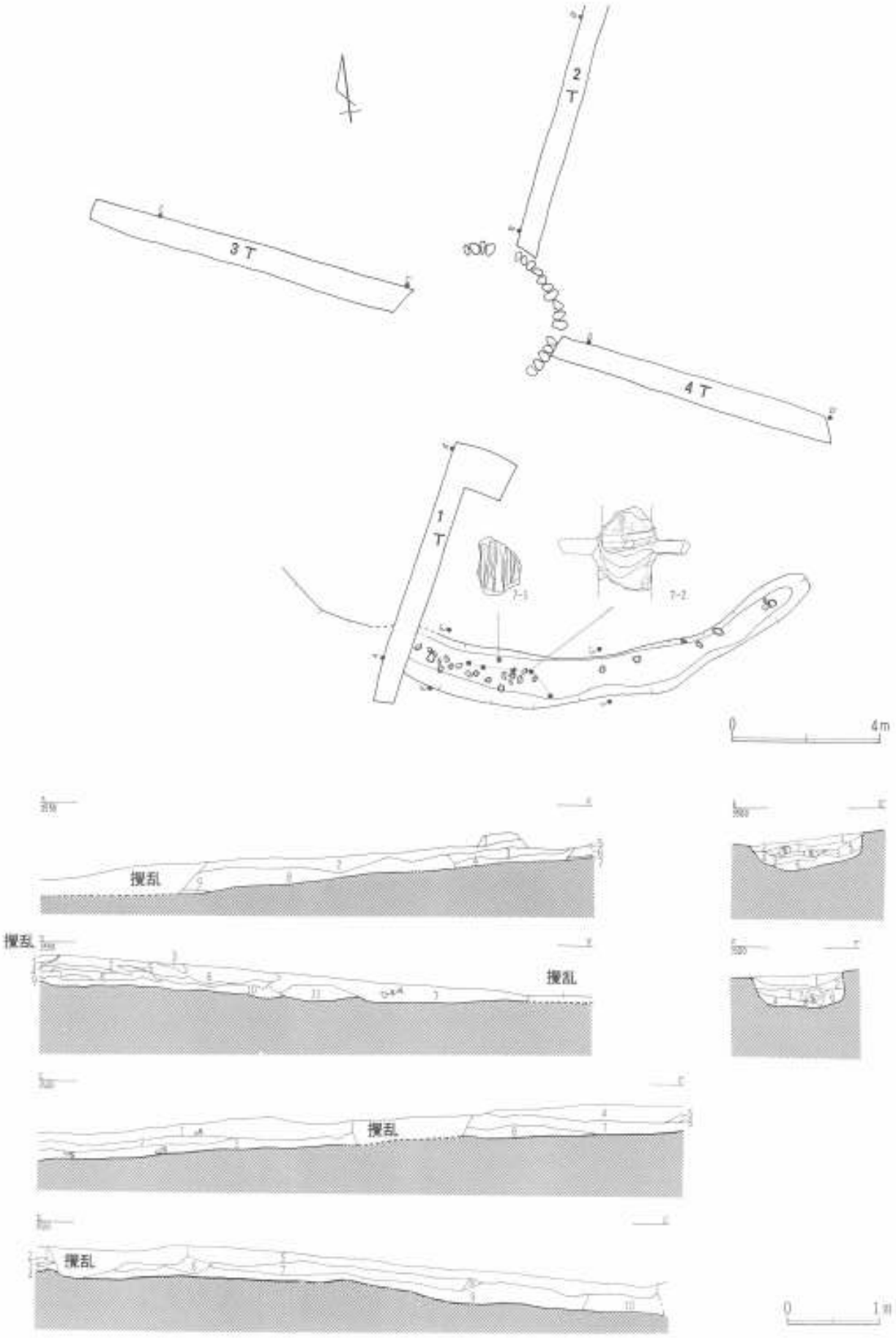
４条検出された溝跡のうち、１号溝跡からは古墳時代中期の土師器の甕、高坏が出土した。２・３号溝跡からは河原石、緑泥片岩が多く出土し、遺物として円筒埴輪・形象埴輪の破片、常滑の片口鉢の破片等が出土している。４号溝跡は遺物の出土をみなかった。

集石遺溝は土壙等を伴わず、直径５cm前後の河原石が、直径約13ｍ、短径約５ｍの長楕円形状に敷き詰められていた。出土遺物はなく、時期も遺構の性格も不明である。

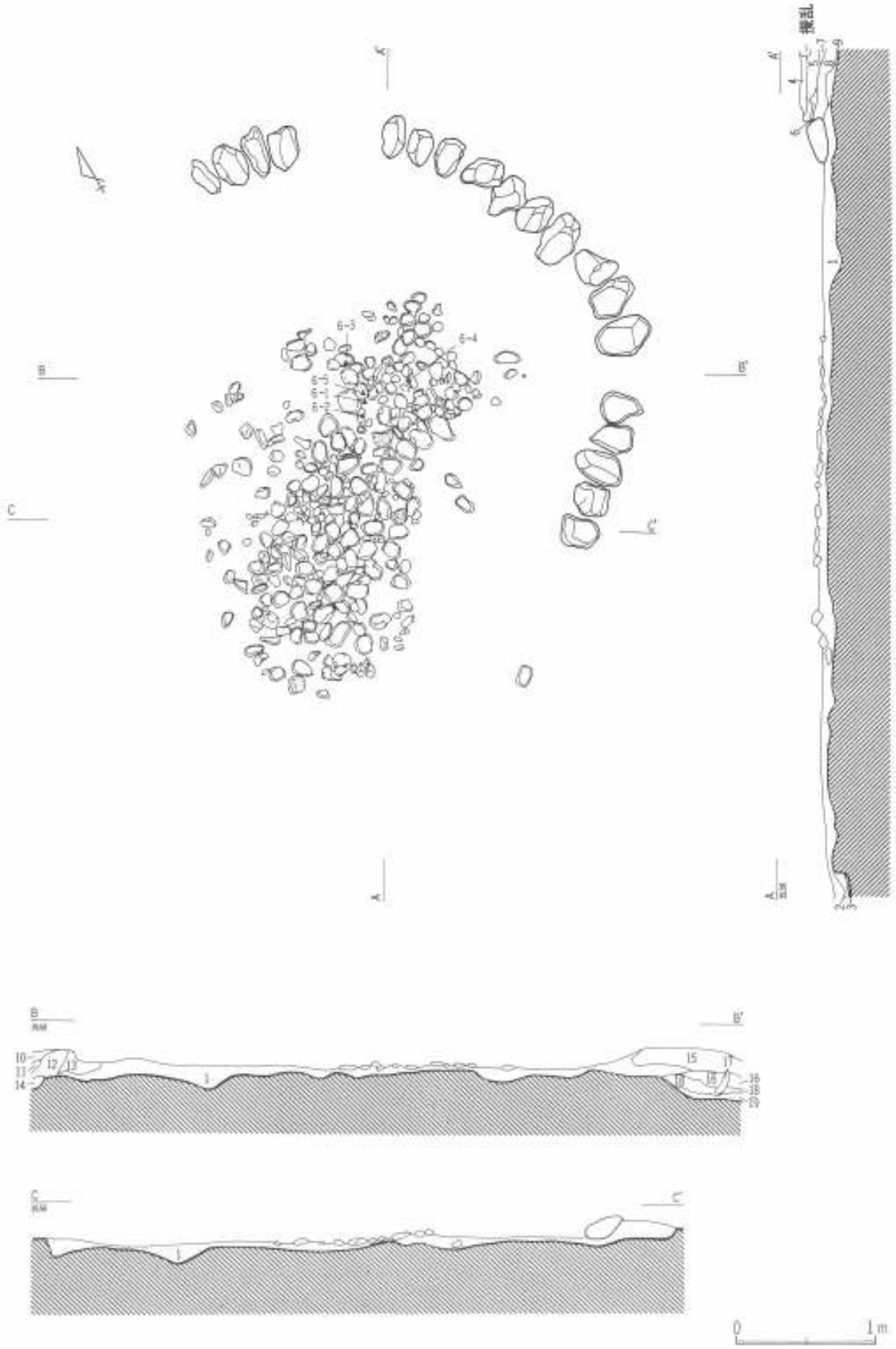
基準点の座標は№１－Ｘ＝＋16,880.000、Ｙ＝－41,990.000、№２－Ｘ＝＋16,860.000、Ｙ＝－42,000.000、№３－Ｘ＝＋16,860.000、Ｙ＝－41,985.000、№４－Ｘ＝＋16,855.000、Ｙ＝－42,000.000、№５－Ｘ＝＋16,855.000、Ｙ＝－41,990.000である。



第3図　天神前遺跡全測図



第４図　１号古墳跡



第５図　１号古墳跡石室

第５章　遺構と遺物

１号古墳跡（第４図）

本遺構は、正三角形の形状を呈する調査区の北側過半を占めて検出された。墳丘は著しく削平を受けており、横穴式石室の一部と周溝の一部が検出されるにとどまった。墳丘の規模については、正確に把握できる状態ではなかった。

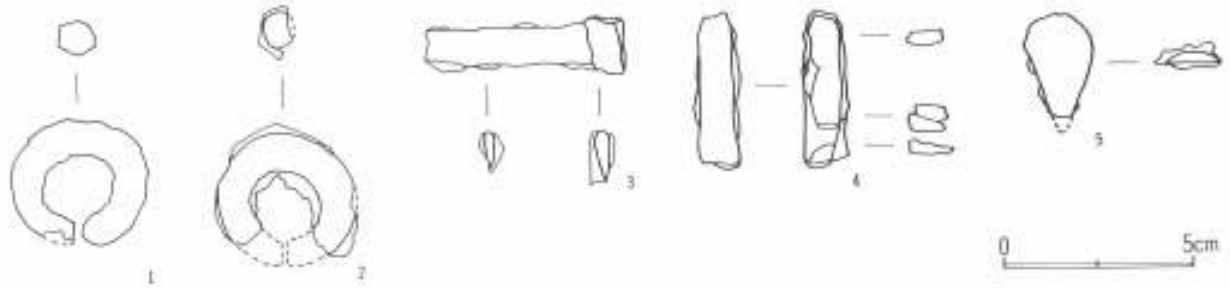
石室（第５図）は、胴張型横穴式石室の形態を示し、辛うじて、玄室の奥壁・東壁・西壁の根石の一部が残存していた。壁面の根石は、長径25～40cmの大きめな河原石を据え置き、主軸はＮ－54°－Ｅを示し、南西向きに開口していた。石室の規模については不明である。

棺床面は攪乱を免れた玄室中央部付近に１ｍ×３ｍの長方形を呈して、一部残存していた。長径10～20cmの扁平な河原石と10cm以下の小礫を敷き詰め、上面を水平に並べていた。

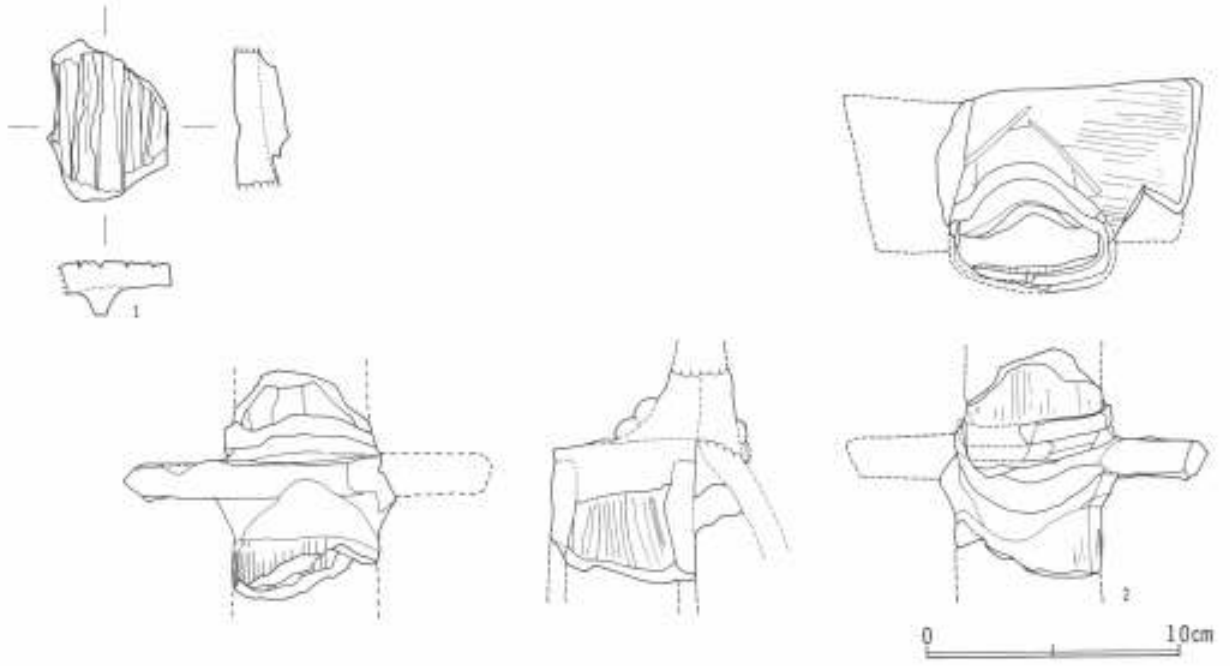
周溝は、墳丘南側で一部確認された。１号集石遺構により攪乱を受けていたが、幅1.2m前後、最深部の深さ0.35m程であった。周溝内からは、墳丘の葺石であったと思われる長径20～30cmの河原石が検出された。残存する周溝から、墳丘径20m程の円墳と考えられる。

遺物は、石室内から耳環、鉄製品が出土し（第６図）、周溝から形象埴輪片が検出された（第７図）。また、一括遺物として、円筒埴輪片・形象埴輪片が出土している（第８図）。

６－１　耳環。鉄芯の耳環である。銹化が進行し、表面を覆っている。ほぼ完形ではあるが、現状を保たず脆い状態である。長径3.6cm、短径3.3cm、断面径0.9cm、



第６図　１号古墳跡石室出土遺物



第７図　１号古墳跡周溝出土遺物

重さ17.5ｇを測る。

6－2　耳環。鉄芯の耳環である。銹化が進行し、表面を覆っている。一部欠損し、現状を保たず脆い状態である。長径3.6cm、断面径0.9cmを測る。

6－3　刀子。切先と茎を欠損する。銹化が著しい。刀身5.3cm残存。刀身幅は0.8～1.3cmである。

6－4　用途不明鉄製品。完形ではなく、何らかの道具の一部と考えられる。最長4.2cm、最大幅1.2cmを測る。

6－5　用途不明鉄製品。鏃の先のように先端の尖ったものである。銹化が著しい。最長2.7cm、最大幅1.8cmを測る。

7－1　形象埴輪。靫形埴輪の破片である。鏃身部を沈線で表現している。表裏面に縦方向の刷毛目が施される。残存長6.4cm、残存幅4.7cm、厚さ2.1cmを測る。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を多く含む。

7－2　形象埴輪。大刀形埴輪の柄頭の端部の破片である。護拳部の粘土板の脱落痕がある。外面・内面とも刷毛目が施され、板状部分の側面は指撫でにて調整されている。柄部と板状部分と護拳部の接合箇所には補強のため粘土を貼り付け、指撫でにて接合痕を消す。板状部分の上、護拳部との接合部分に粘土紐が２本貼付されている。残存高9.0cm、板状部分の厚さ1.4cmを測る。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂・細礫を多く含む。

１号古墳跡墳丘土層断面註（第４図）

Ａ－Ａ' 断面

１層　褐色土（小石含む）
２層　暗褐色土（礫少量含む）
３層　暗褐色土
４層　暗褐色砂質土
５層　暗褐色砂礫層
６層　暗褐色土
７層　暗茶褐色土
８層　暗灰褐色土（小石、礫含む）
９層　暗褐色土（若干砂質）

Ｂ－Ｂ' 断面

１層　暗褐色土（青灰色粘土少量含み、鉄分多量に含む）
２層　暗褐色土（青灰色粘土、鉄分多量に含む）
３層　褐色土
４層　暗褐色土
５層　暗褐色土（青灰色粘土若干含む）
６層　暗青灰色粘土（鉄分多量に含む）
７層　暗褐色砂質土
８層　暗褐色土と青灰色粘土（鉄分多量に含む）の混合層
９層　暗褐色土（青灰色粘土多量に含む）
10層　暗褐色土（青灰褐色粘土若干含む）
11層　暗褐色土

Ｃ－Ｃ' 断面

１層　暗褐色砂質土（火山灰多量に含む）
２層　暗褐色土（φ１～２cm程の小礫少量含む）
３層　暗褐色砂質土（φ１～５cm程の小礫多量に含む）
４層　暗褐色土
５層　褐色土
６層　暗褐色土（青灰色粘土少量含む）
７層　黒褐色土（青灰色粘土粒子若干含み鉄分含む）
８層　暗茶褐色土

Ｄ－Ｄ' 断面

１層　暗褐色土（青灰色粘土、鉄分多量に含む）
２層　暗褐色土（青灰色粘土少量含む）
３層　暗褐色土
４層　黄茶褐色砂質土
５層　暗褐色土（火山灰含む）
６層　暗褐色土
７層　暗褐色土
８層　暗褐色土
９層　暗茶褐色土
10層　黒褐色土（火山灰含む）

第８図　１号古墳跡出土一括遺物

1号古墳跡周溝土層断面註（第4図）

E－E' 断面

1層　暗褐色土（火山灰多量に含み褐色土粒子含む）
2層　黒褐色土（火山灰含む）
3層　暗褐色土
4層　暗褐色土（火山灰、焼土、小礫含む）
5層　暗褐色土（黒褐色土含む）
6層　黒褐色砂質土（小礫、焼土含む）

F－F' 断面

1層　暗褐色土（火山灰多量に含み、褐色土粒子含む）
2層　暗褐色土（火山灰、焼土、炭化物含む）
3層　暗褐色土（黄褐色土粒子含む）
4層　黒褐色砂質土
5層　暗褐色土（暗黄灰褐色土粒子若干含む）
6層　黒褐色土（暗褐色土含む）
7層　暗褐色土（火山灰多量に含む）

1号古墳跡石室土層断面註（第5図）

1層　暗褐色砂礫層（φ1～3cm程の礫多量に含む）
2層　暗褐色土（しまる。若干小石含む）
3層　暗茶褐色土
4層　暗褐色土（青灰色粘土多量に含む）
5層　暗褐色土（青灰色粘土少量含み、鉄分多量に含む）
6層　褐色土（青灰色粘土含み、鉄分多量に含む）
7層　暗褐色土
8層　暗褐色土（青灰色粘土多量に含む）
9層　暗褐色土（青灰色粘土若干含む）
10層　暗褐色土
11層　褐色土
12層　暗褐色土（青灰色粘土少量含む）
13層　暗褐色土（若干小礫含む）
14層　黒褐色土
15層　暗褐色土（青灰色粘土、鉄分多量に含む）
16層　暗褐色土（青灰色粘土少量含む）
17層　褐色土
18層　暗褐色土
19層　黄茶褐色砂質土

1号古墳跡出土一括遺物（第8図）

8－1　円筒埴輪。口縁部の破片である。大きく外反して開き、端部に横撫でを施し、外面に縦方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目がある。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗く、中粒砂・細粒砂を多く含み、細礫も含む。4Tより出土。

8－2　円筒埴輪。口縁部の破片である。緩く外反して開き、端部に横撫でを施し、外面に縦方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目がある。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を多く含み、粗粒砂も含む。石室箇所表土より出土。

8－3　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形である。外面は縦方向の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で外面は橙褐色、内面は茶褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を多く含む。3Tより出土。

8－4　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形である。外面は粗い縦方向の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されている。焼成は軟質で茶褐色の色調を呈する。胎土は粗く、粗粒砂を多く含み、細礫も含む。石室箇所表土より出土。

8－5　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は低い台形である。凸帯の下端は丁寧な指撫でにて接合痕を消しているが、上端は接合痕が残る。外面調整は不明であるが、内面は撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂を多く含み、細礫も含む。1Tより出土。

8－6　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形である。凸帯の両端を指撫でにて調整し、接合痕を丁寧に消し、外面は縦方向の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で茶褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂・粗粒砂を多く含む。

8－7　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形である。外面は縦方向の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されているが、磨滅が激しい。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を多く含み、粗粒砂も含む。1Tより出土。

8－8　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面はM字状の

形態である。外面は縦方向の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂・細礫を含む。1Tより出土。

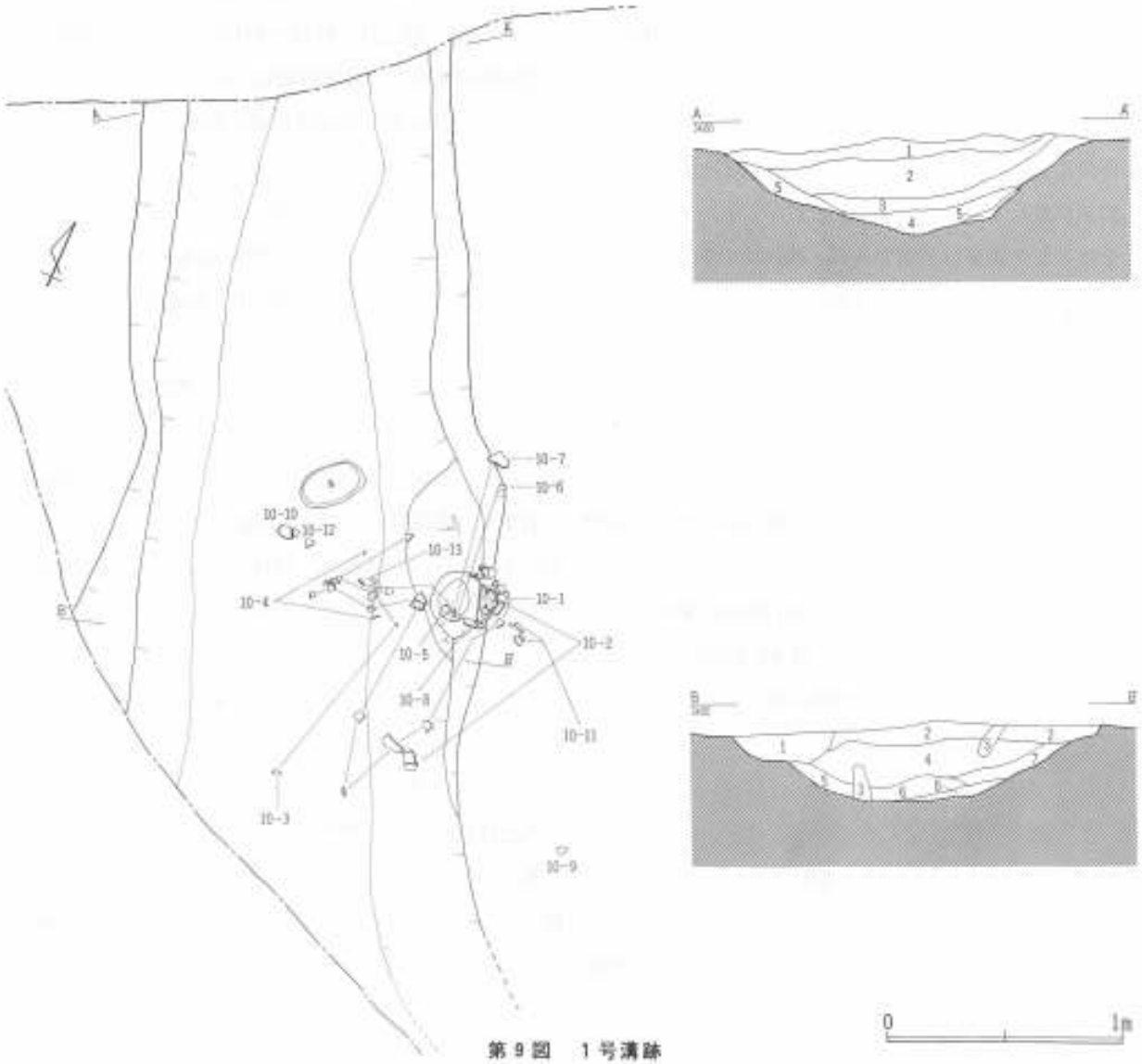
8－9　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面はM字状の形態である。外面は縦方向の刷毛目、内面はナナメ方向の刷毛目を施した後、粗い指撫でにて調整されている。磨滅が激しい。焼成はやや軟質で茶褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を多く含み、粗粒砂も含む。石室箇所表土より出土。

8－10　形象埴輪。家形埴輪の棟飾りである千木の部位である。表面・裏面・側面とも刷毛目が施されている。焼成はやや軟質で茶褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を含む。石室箇所表土より出土。

8－11　形象埴輪。家形埴輪の棟飾りである千木の部位である。表面・裏面に刷毛目が施されている。側面・上面は平らな面に押さえ付けられた後、指撫でにて調整されている。焼成はやや軟質で橙褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を含む。石室箇所表土より出土。

8－12　形象埴輪。箱形の形象埴輪の破片である。家形埴輪の一部か。外面にボタン状粘土の飾りがあり、刷毛目が残る。内面は撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂を多く含み、細礫も含む。3Tより出土。

8－13　形象埴輪。馬形埴輪の鼻先の部位の破片である。U字状に曲げた粘土板によって頭部が形成されていたと考えられる。鼻先下部に粘土板を貼り付け、沈線が一本入る。外面、内面ともに刷毛目が施されている。端部の調整は磨滅により不明である。焼成はやや軟質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂・粗粒砂を多く含み、細礫も含む。石室箇所表土より出土。



第9図　1号溝跡

8－14　形象埴輪。飾り馬の馬形埴輪の障泥の裾部の破片である。粘土板により成形され、外面に箆描き沈線で模様が描かれている。外面はナナメ刷毛目を施し粗い指撫でにて調整され、内面はナナメ刷毛目、端部は指撫でにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂を多く含み、細礫も含む。残存高8.9cm、残存長7.7cmを測る。1Tより出土。

8－15　形象埴輪。馬形埴輪のたてがみの部位もしくは、盾形埴輪の破片か。筒形の部位に粘土板を貼り付けている。外面は刷毛目を施し、内面は指撫でにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を多く含み、粗粒砂・細礫も含む。

8－16　形象埴輪。人物埴輪の頸部の破片か。外面の成形は粗く、刷毛目を施した後、指撫でにて調整されている。内面は、頸部の立ち上がり部分が刷毛目を施した後粗い指撫でで、肩部が指撫でにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂・粗粒砂を多く含み、細礫も含む。3Tより出土。

8－17　形象埴輪。人物埴輪の腰部の破片か。円筒状の部位に、張り出す様に粘土が厚く貼り付けられている。磨滅が激しく、外面に刷毛目の痕が若干みてとれるが、全体として調整は不明である。焼成はやや軟質で茶褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂・細礫を多く含む。

1号溝跡（第9図）

本遺構は、調査区の西端角、A－7・8グリット内に検出されたが、確認できたのは長さが約4mであった。南南東から北北西へ走っており、主軸はN－26°－Wである。

規模は、断面A－A'において幅1.57m、深さ0.42m、断面B－B'において幅1.57m、深さ0.34mを測る。

遺物は、古墳時代中期の土師器の甕、高坏等が出土した（第10図）。

10－1　甕（土師器）。口径17.2cm、頸部径15.2cm、残存高13.1cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を含み、淡褐色の色調を呈する。一部煤の付着がある。口縁部は「く」字状に外反する。口縁部外面は横撫で、口縁部内面は刷毛調整後横撫で、頸部から肩部にかけては刷毛調整後撫で、胴部内外面は箆撫でされている。口縁部、胴部の1／3残存。

10－2　甕（土師器）。底径5.7cm、残存高4.0cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を含み、淡褐色の色調を呈する。一部煤の付着がある。底面は箆撫で、外面は刷毛調整と箆撫でが混在し、内面は箆撫でされている。10－1と同一個体と考えられる。

10－3　甕（土師器）。口径12.3cm、頸部径9.9cm、胴部最大径13.8cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を多く含み、細礫も含み、淡褐色の色調を呈する。口縁部は「く」字状に外反する。口縁部外面は一部刷毛目が入るが横撫でされ、口縁部内面は刷毛調整後横撫でされ、胴部外面は刷毛調整されている。口縁部、胴部の1／5残存。

10－4　甕（土師器）。口径13.2cm、頸部径10.8cm、残存高2.4cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を含み、淡褐色の色調を呈する。口縁部外面は一部刷毛目が入るが横撫でされ、口縁部内面は刷毛調整後横撫でされている。口縁部の1／5残存。

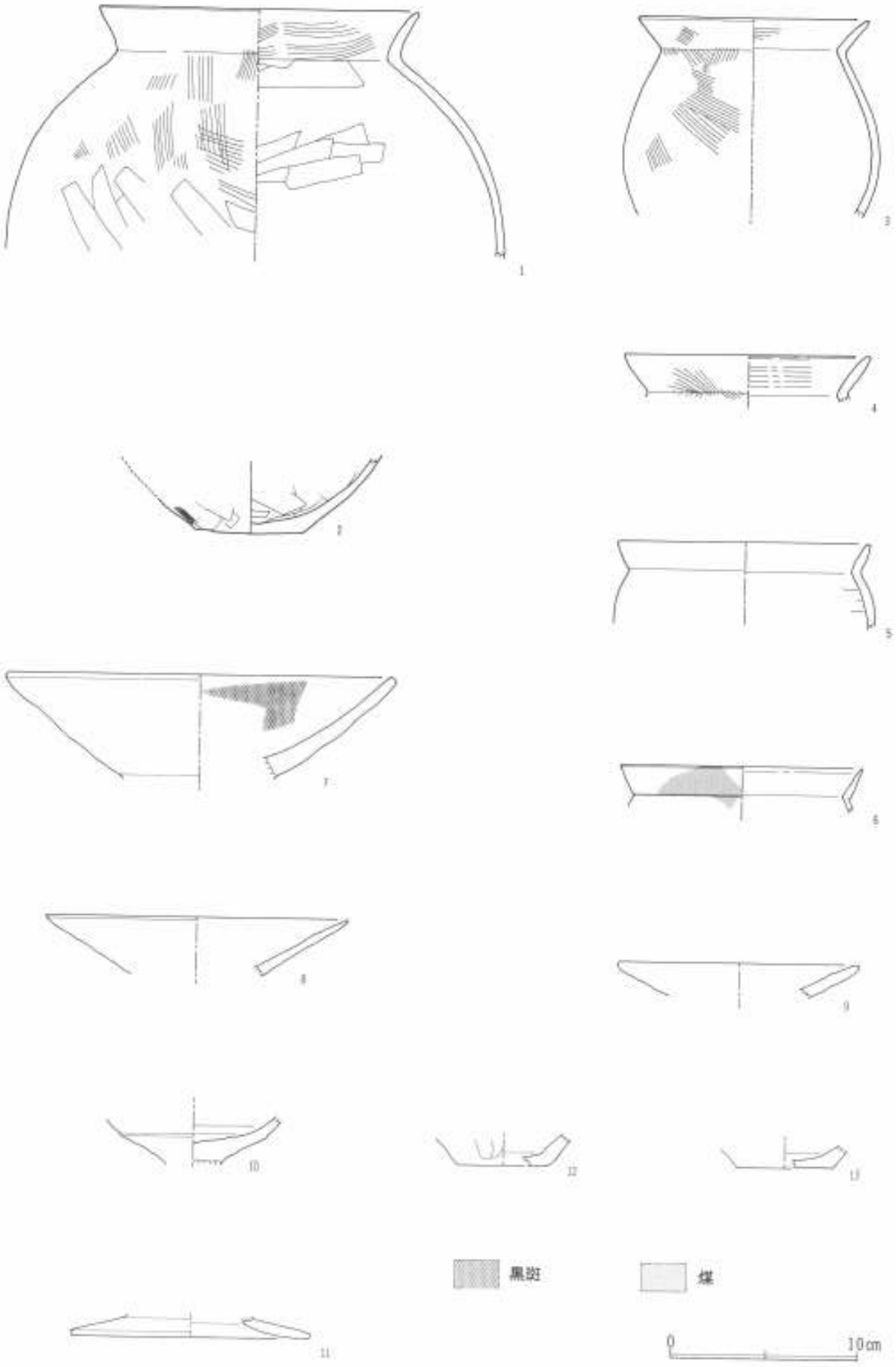
10－5　甕（土師器）。口径13.5cm、頸部径12.4cm、残存高4.4cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を多く含み、淡褐色の色調を呈する。口縁部は内外面横撫でされている。口縁部の1／10残存。

10－6　甕（土師器）。口径13.0cm、頸部径11.4cm、残存高2.2cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を含み、焼成軟質で脆く、赤褐色の色調を呈する。口縁部外面に煤が付着する。頸部に段を持つ。口縁部の1／5残存。

10－7　高坏（土師器）。口径21.0cm、残存高5.6cm。胎土は中粒砂を多く含み、粗粒砂・細礫も含み、淡褐色の色調を呈する。内面に黒斑がある。内外面とも箆磨きされている。坏部の1／5残存。

10－8　高坏（土師器）。口径16.2cm、残存高3.1cm。胎土は中粒砂・粗粒砂・細礫を含む。外面は茶褐色、内面は橙褐色の色調を呈する。内外面とも磨かれている。坏部の1／5残存。

10－9　高坏（土師器）。口径13.0cm、残存高1.8cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を含み、淡褐色の色調を呈する。



第10図　1号溝跡出土遺物

口縁部外面に煤が付着する。内外面とも磨かれている。口縁部の1／9残存。

10－10　高坏（土師器）。接合部。残存高2.35cm。外面にわずかな段をもつ。外面は箆撫でされている。胎土は粗粒砂を多く含み、外面は茶褐色で煤けて黒い部分があり、内面は橙褐色の色調を呈する。接合部の1／2残存。

10－11　高坏（土師器）。脚部の脚裾部である。底径12.6cm、残存高1.1cm。胎土は中粒砂・粗粒砂・細礫を含み、焼成は軟質で脆く、橙褐色の色調を呈する。内外面に煤けて黒い部分がある。脚裾部の1／2残存。

10－12　土師器底部。底径4.8cm、残存高1.4cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を含み、淡褐色の色調を呈する。内外面、底部は撫でられている。底部の1／3残存。

10－13　土師器底部。底径5.2cm、残存高0.9cm。胎土は中粒砂・粗粒砂を含み、淡褐色の色調を呈する。外面、底部は撫でられている。底部の1／5残存。

1号溝跡土層断面註（第9図）

A－A' 断面

1層　暗褐色土（火山灰、暗灰黄褐色土粒子少量含みかたくしまる）

2層　暗褐色土（暗灰黄褐色土粒子・ブロック、鉄分少量含み、かたくしまる）

3層　暗褐色土（暗青灰色粘質土少量含み、暗灰黄褐色土粒子、鉄分含む）

4層　暗褐色土（暗青灰色粘質土、鉄分多量に含み、若干粘性有る）

5層　暗褐色土（暗灰黄褐色土粒子多量に含み、若干粘性有る）

B－B' 断面

1層　暗褐色土（暗灰黄褐色土微粒子含み、若干粘性有る）

2層　暗褐色土（暗灰黄褐色土微粒子、火山灰含み、かたくしまる）

3層　暗灰黄褐色砂質土

4層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子・ブロック少量含む）

5層　暗褐色土（暗灰黄褐色土粒子多量に含む）

6層　暗褐色土（暗青灰色粘質土、鉄分多量に含む）

7層　暗褐色土（暗灰黄褐色土粒子多量に含む）

8層　暗灰黄褐色砂質土（鉄分少量含む）

2・3・4号溝跡（第11図）

本遺構群は、調査区の南西部から検出された。

2号溝跡は、A－7、B－6・7グリット内に検出され、確認できたのは長さが約6mであった。東南東から北北西へ走っており、主軸はN－59°－WからN－22°－Wに変化している。

規模は、断面A－A'において幅2.70m、地表面からの深さ0.96m、断面B－B'において幅2.10m、深さ0.43m、断面C－C'において幅2.20m、深さ0.24mを測る。

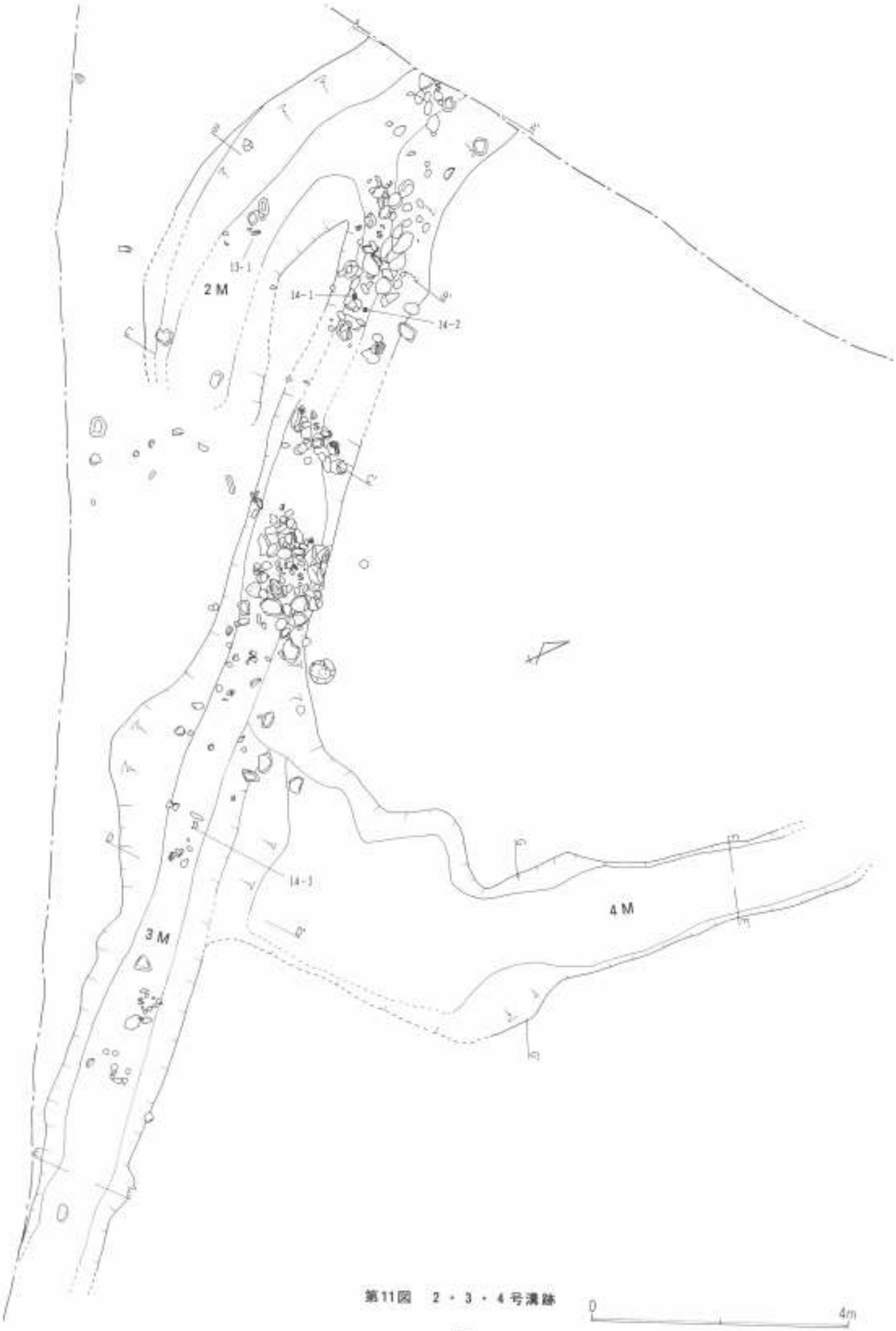
遺物は、須恵器の甕の破片（第13図）と河原石数点が出土した。

13－1　甕（須恵器）。胴部の破片である。外面は平行叩きで成形し、内面の当て目は同心円を呈する。焼成は良好で、色調は、外面は自然釉がかかり黒褐色を呈し、内面は灰色である。断面は暗灰褐色を呈する。胎土中に白砂粒を含む。

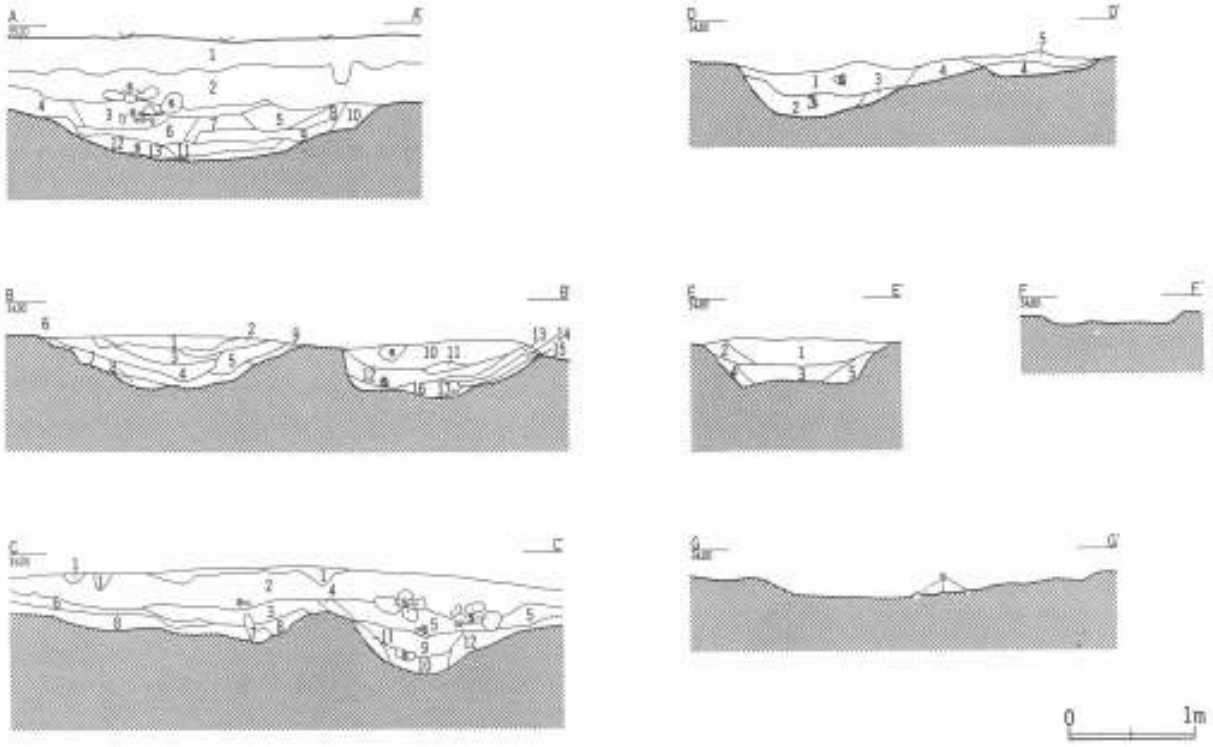
3号溝跡は、B－7、C－7・8、D－8、E－8グリット内に検出され、確認できたのは長さが約17mであった。東南東から西北西へ走っており、主軸はN－59°－Wである。西端で2号溝と接する。

規模は、断面B－B'において幅1.58m、深さ0.44m、断面C－C'において幅1.24m、深さ0.42m、断面D－D'において幅1.94m、深さ0.36m、断面E－E'において幅1.50m、深さ0.39mを測る。

遺物は、円筒埴輪・形象埴輪の破片、須恵器の破片、陶器の破片が出土した（第14図）。また、長径10～40cmの河原石と緑泥片岩が多量に出土した。これは、熊谷市史前篇（昭和38年4月1日発行）の石原古墳群の記述に「これらの古墳の石室は荒川玉石をもって築造され、天井は秩父青石の平石でおゝわれている。」とあり、古墳の石室のものが流れ込んだとも考えられる。



第11図　2・3・4号溝跡

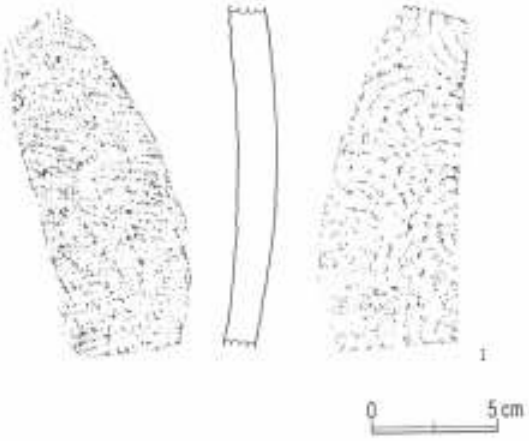


第12図　2・3・4号溝跡土層断面図

14－1　円筒埴輪。外面に縦方向の刷毛目、内面はナナメ方向の刷毛目を施した後、指撫でにて調整されている。焼成は硬質で、赤褐色の色調を呈する。胎土は細粒砂・中粒砂を多く含む。

14－2　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面はM字状の形態である。凸帯の上端は丁寧な指撫でにて若干凹む。外面に縦方向の刷毛目、内面はナナメ方向の刷毛目を施した後、撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で茶褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂・粗粒砂を多く含み、細礫も含む。

14－3　甕（土師器）。口径17.0cm、残存高2.6cm。胎土は細粒砂・中粒砂を多く含み、粗粒砂も含み、茶褐色の色調を呈する。内外面とも横撫でされている。口縁部の1／12残存。



第13図　2号溝跡出土遺物

14－4　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は三角形である。外面に縦方向の刷毛目、内面にナナメ方向の刷毛目を施した後、指撫でにて調整されている。焼成は硬質で橙褐色の色調を呈する。胎土は細かく、中粒砂を多く含む。覆土中より出土。

14－5　形象埴輪。家形埴輪の棟飾りである堅魚木もしくは、人物埴輪の腕の部位か。外面は刷毛目を施した後、指撫でにて調整されている。焼成は硬質で茶褐色の色調を呈する。胎土は細かいが、粗粒砂・細礫を若干含む。覆土中より出土。

14－6　形象埴輪。人物埴輪の頸部から肩部である。首飾のボタン状粘土が3個残存し、1個の脱落痕がある。外面は丁寧な撫で、内面は撫でにて調整されている。焼成は硬質で淡橙褐色の色調を呈する。胎土は細かいが、粗粒砂・細礫を若干含む。覆土中より出土。

14－7　器種不明。底部の破片である。残存高3.3cm、底径12.2cm。外面、底面に粗い刷毛調整がされている。内面上部にも刷毛目が施され、下部は撫でられている。焼成は堅緻で、外面は灰褐色、内面は淡灰褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂・粗粒砂・細礫を含む。底部

の1／4残存。覆土中より出土。

14－8　片口鉢（常滑焼）。底部の破片である。残存高4.4cm。外面は篦削りされ、脚部は貼付後撫でられている。内面上部に自然釉がかかっている。焼成堅緻で灰色を呈する。胎土は中粒砂・粗粒砂・細礫を含む。底部の1／4残存。覆土中より出土。

4号溝跡は、C－7、D－6・7・8グリット内に検出され、確認できたのは長さが約10mであった。北から南西へ走っており、主軸はS－1°－WからS－47°－Wに変化している。南端で3号溝と接する。

規模は、断面F－F'において幅1.14m、深さ0.08m、断面G－G'において幅2.76m、深さ0.18mを測る。

本遺構からは、遺物の出土をみなかった。

2・3・4号溝跡土層断面註（第12図）

A－A'断面

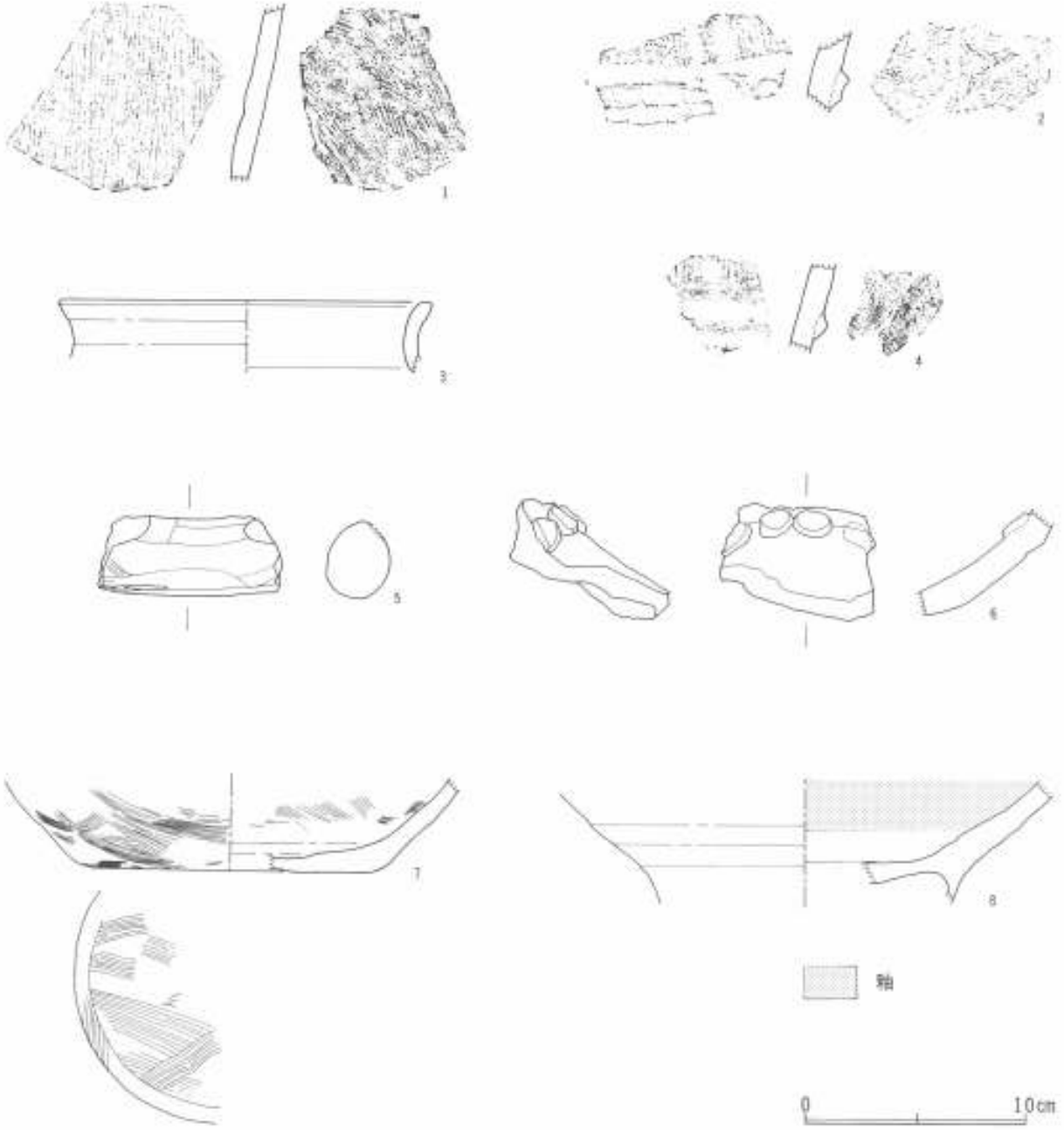
1層　耕作土

2・3層　暗褐色土（炭化物、焼土、火山灰含む）

4層　暗褐色土（火山灰、暗青灰褐色土粒子含む）

5層　暗褐色土（火山灰、青灰色粘土粒子、鉄分含む）

6層　暗褐色土（若干砂質）



第14図　3号溝跡出土遺物

7層　黒褐色砂質土（暗灰黄褐色土粒子、鉄分含む）
8層　黒褐色土（火山灰含む）
9層　暗褐色砂質土（暗灰黄褐色土粒子、鉄分含む）
10層　暗褐色土（火山灰含む）
11層　暗褐色砂質土（暗青灰黄褐色粘土粒子多量に含む）
12層　暗褐色砂質土（火山灰、暗黄褐色土粒子含む）
13層　暗茶褐色砂質土（鉄分少量含む）

B－B′ 断面

1層　黒褐色土（火山灰多量に含む）
2層　暗褐色土（火山灰多量に含む）
3層　暗褐色土（淡黄褐色土粒子多量に含む）
4層　暗褐色土（淡黄褐色土粒子少量含み炭化物含む）
5層　淡褐色土（火山灰、淡黄褐色土粒子・ブロック含む）
6層　褐色土（淡黄灰色土粒子含み、粘性有る）
7層　褐色土（淡黄灰色土粒子多量に含む）
8層　明褐色土
9層　淡褐色土
10層　暗褐色土（火山灰多量に含む）
11層　暗褐色砂質土（火山灰含む）
12層　暗褐色土（火山灰、暗灰黄褐色土粒子、青灰色粘土粒子含む）
13層　暗灰褐色土（青灰黄色粘土多量に含み、鉄分含む）
14層　暗灰褐色土（暗黄灰褐色土粒子含む）
15層　暗褐色砂質土
16・17層　暗灰褐色砂質土

C－C′ 断面

1層　暗灰褐色砂質土（火山灰含む）
2層　黒褐色土（火山灰含み、暗黄灰褐色土粒子・ブロック少量含む）
3層　暗灰茶褐色土（火山灰、炭化物含み、若干砂質）
4層　暗黄灰色土
5層　暗灰茶褐色土（火山灰、炭化物含み、若干砂質）
6層　暗茶褐色土（暗黄灰褐色土粒子少量含む）
7層　黒灰褐色土
8層　暗灰褐色土（暗黄灰褐色土粒子・ブロック下層付近に多量に含む）
9層　暗灰褐色砂質土
10層　暗灰色砂質土
11層　暗黄灰褐色砂質土
12層　暗灰色砂質土（粘性有る）

D－D′ 断面

1層　暗灰褐色土（暗灰黄褐色土粒子含み、若干砂質）
2層　暗灰色砂質土
3層　暗灰褐色土（暗灰黄褐色土粒子多量に含む）
4層　暗灰褐色砂質土（暗灰黄褐色土粒子含む）
5層　暗灰褐色砂質土（青灰色粘土、鉄分若干含む）

E－E′ 断面

1層　暗褐色粘質土（火山灰、焼土含む）
2層　暗褐色粘質土
3層　暗灰褐色土（若干砂質）
4層　暗灰茶褐色土（若干砂質）
5層　暗灰褐色土（灰黄褐色土ブロック含み、若干砂質）

1号集石遺構（第15図）

本遺構は、調査区の中心よりやや西、D－5・6、E－5・6・7、F－6・7グリットに渡って検出された。

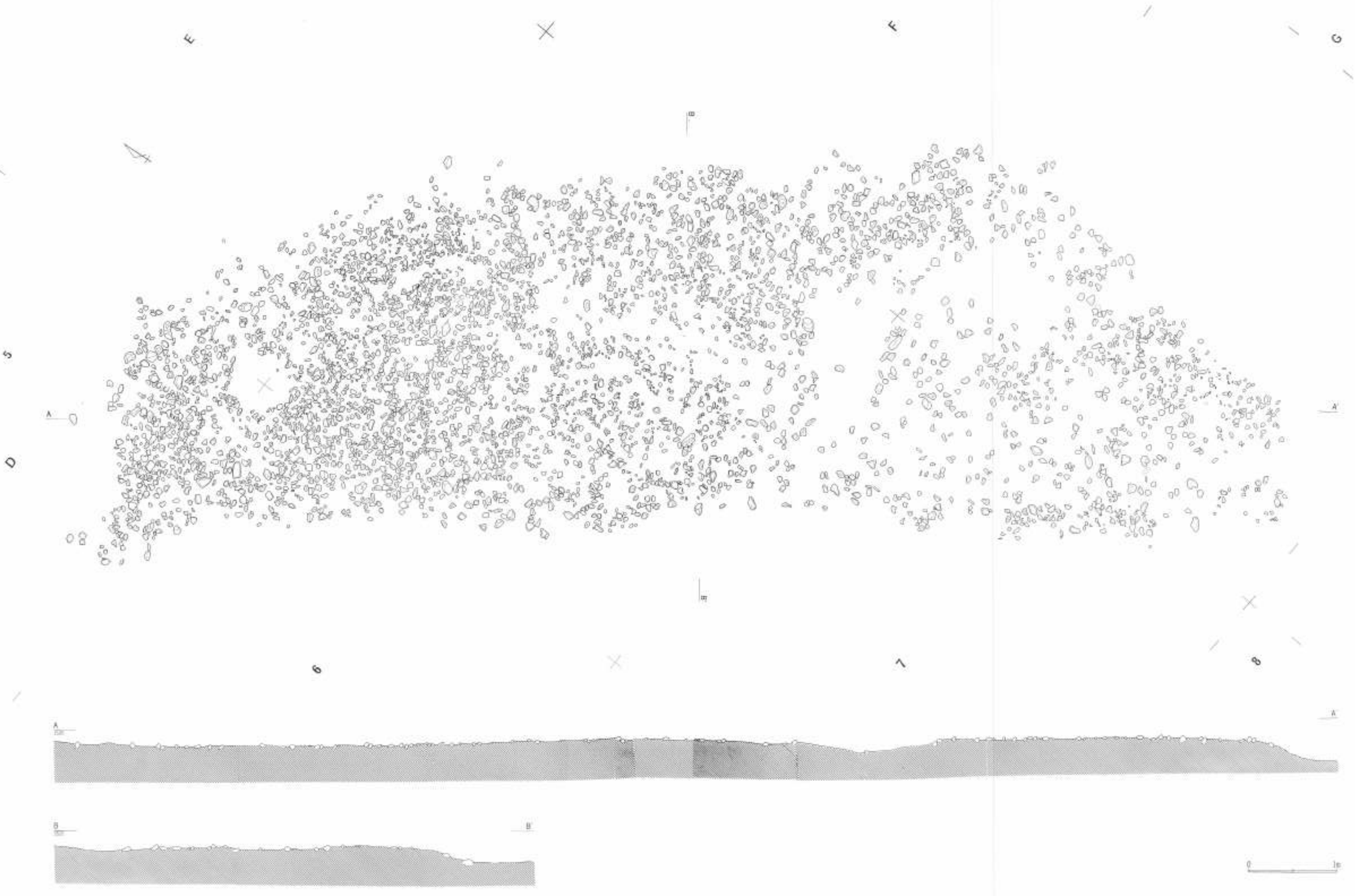
直径5cm前後の河原石が、長軸の長さ約13m、短軸の長さ約5mの長楕円形状に敷き詰められ、特に北半分が密に敷き詰められていた。

土壙等を伴わず、遺物も検出されなかった。

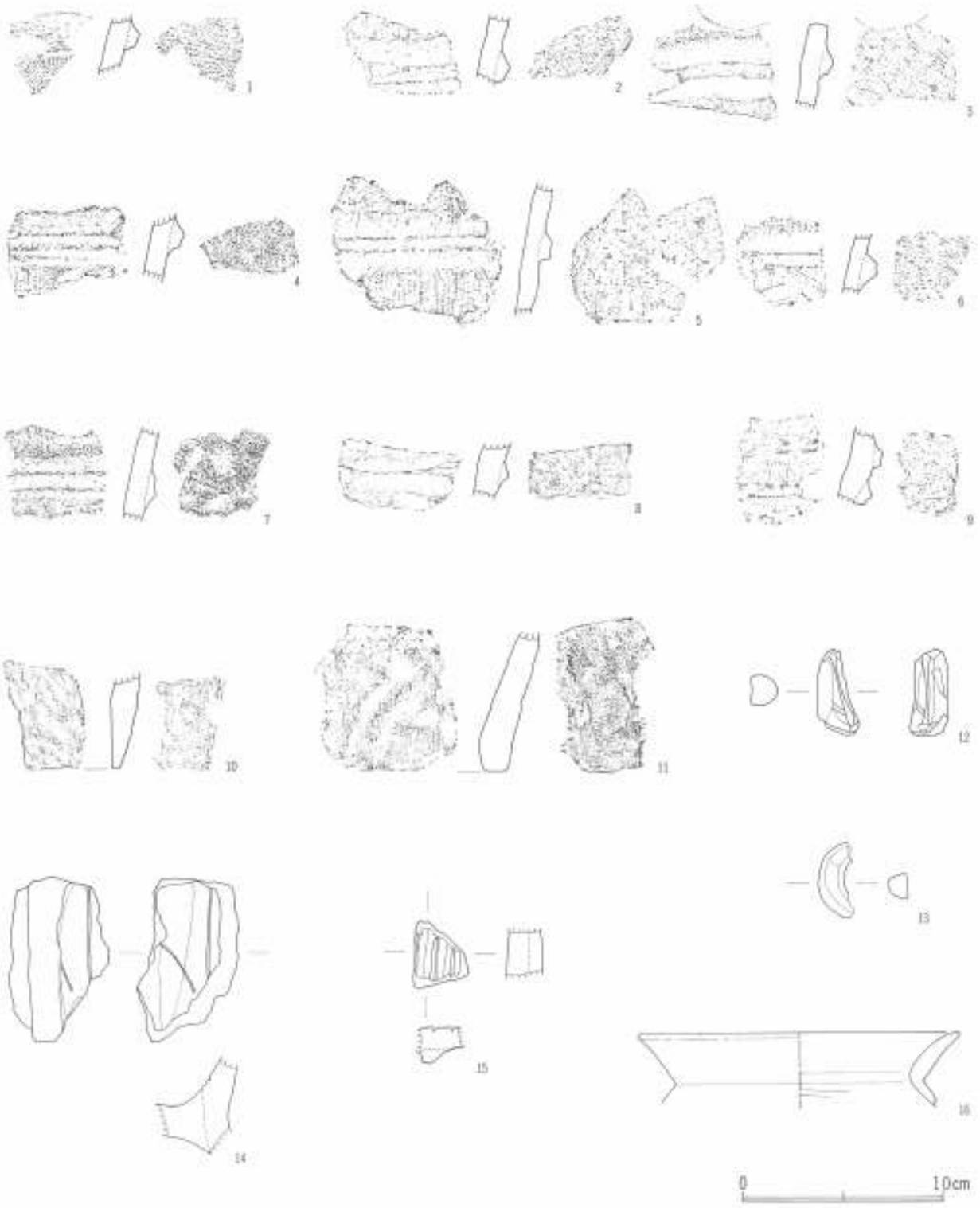
天神前遺跡出土一括遺物（第16図）

16－1　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形である。凸帯の上端は指撫でにて接合痕を消しているが、下端は接合痕が残る。外面調整は不明であるが、内面はナナメ方向の刷毛目を施した後、粗い指撫でにて調整されている。磨滅が激しい。焼成はやや軟質で赤褐色の色調を呈する。胎土は細かく、中粒砂を多く含み、粗粒砂も含む。

16－2　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形である。外面は縦方面の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂を多く含み、φ1cm程の礫も含む。



第15図　1号集石遺構



第16図　天神前遺跡出土一括遺物

16－3　円筒埴輪。凸帯部分の破片で上部に透し孔の痕跡がある。透し孔は円形になると推測される。断面は低い台形だが、両端が横撫でにて調整され高さが強調されている。外面は縦方向の刷毛目、内面はナナメ方向の刷毛目を施した後、粗い指撫でにて調整されている。焼成はやや軟質で橙褐色の色調を呈する。胎土は細かいが、粗粒砂・細礫を若干含む。

16－4　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形である。外面は縦方向の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されている。焼成はやや軟質で茶褐色の色調を呈する。胎土は細かいが、粗粒砂・細礫を若干含む。

16－5　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形であ

る。外面は縦方向の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗く、粗粒砂を多く含み、細礫も含む。

16－6　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は台形である。外面は縦方向の刷毛目、内面は撫で付けにて調整されている。磨滅が激しい。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂を多く含み、細礫も含む。

16－7　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は突出の低いM字状の形態である。外面は縦方向の刷毛目、内面は篦撫でにて調整されている。磨滅が激しい。焼成は硬質で茶褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂を多く含み、細礫も含む。

16－8　円筒埴輪。凸帯部分の破片で、断面は突出の低い三角形である。外面調整は不明であるが、内面は撫で付けにて調整されている。焼成は硬質で橙褐色の色調を呈する。胎土は細かく、中粒砂を多く含む。

16－9　形象埴輪。器台部分の破片と思われる。凸帯が近接して二本貼付されている。断面は台形とM字形の中間的形態である。外面調整は不明であるが、凸帯の両端は丁寧な横撫でが施されている。内面には指押圧痕があり、撫でにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂・粗粒砂を多く含む。

16－10　円筒埴輪。基底部の破片である。内外面とも撫でにて調整されている。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は細かいが、粗粒砂を若干含む。

16－11　円筒埴輪。基底部の破片である。外面は磨滅が激しいが、縦方向の刷毛目の痕が若干みられる。内面は撫でにて調整されている。焼成はやや軟質で橙褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂・細礫を含む。

16－12　形象埴輪。人物埴輪の髪、「美豆良」の破片である。焼成は硬質で茶褐色の色調を呈する。胎土は粗粒砂・細礫を含む。残存高4.3cm。

16－13　形象埴輪。人物埴輪の耳環の破片である。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂・粗粒砂を含む。残存高3.8cm。

16－14　形象埴輪。盾形埴輪の破片である。筒形の部位に粘土板を貼り付けている。表面に篦描き沈線で鋸歯文が描かれている。内外面は撫でにて調整され、内面には指押圧痕が残っている。焼成は硬質で、外面は橙褐色の色調を、内面は淡褐色の色調を呈する。胎土は細かく、中粒砂を含む。

16－15　形象埴輪。靫形埴輪の破片である。鏃身部を沈線で表現している。表裏面に縦方向の刷毛目が施されている。残存長3.4cm、残存幅2.3cm、厚さ1.8cmを測る。焼成は硬質で赤褐色の色調を呈する。胎土は中粒砂を多く含む。１号古墳跡周溝から検出された靫形埴輪（７－１）と同一個体と考えられる。

16－16　甕（土師器）。口径16.2cm、頸部径12.4cm、残存高3.4cm。胎土は中粒砂を含み、粗粒砂・細礫も若干含み、淡茶褐色の色調を呈する。口縁部は「く」字状に外反する。口縁部内外面は横撫でされている。口縁部の１／10残存。

天神前遺跡　写真図版

1， 1号古墳跡全景

2． 1号古墳跡石室

図版 2

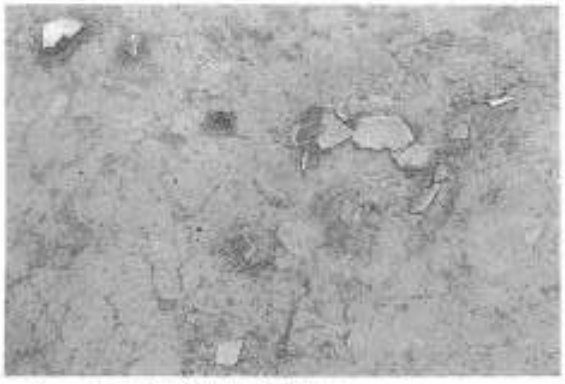
1．　1号古墳跡石室遺物出土状況

2．　1号古墳跡石室根石検出状況

3．　1号古墳跡石室掘方検出状況

4．　1号溝跡

5．　1号溝跡土層断面　A－A′



6．　1号溝跡遺物出土状況　1

7．　1号溝跡遺物出土状況　2

1．　1号溝跡遺物出土状況 3

2．　2・3号溝跡

3．　3・4号溝跡

4．　3号溝跡河原石出土状況

5．　1号集石遺構

6．　発掘調査風景

7．　発掘調査風景

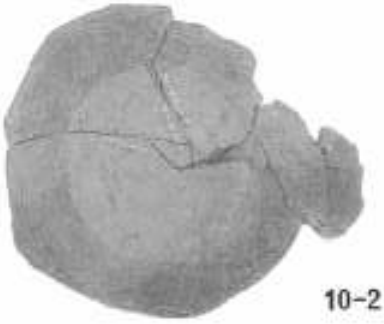
図版 4

1．　1号古墳跡石室出土遺物

7-1

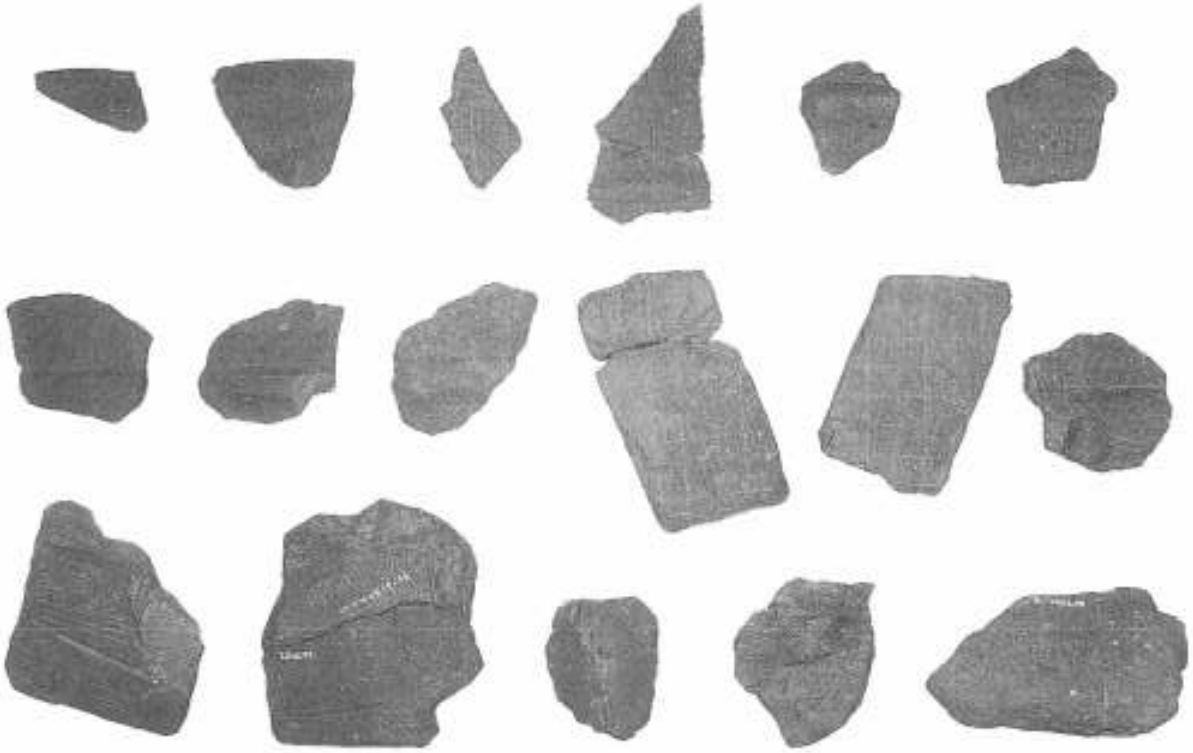
7-2

10-1

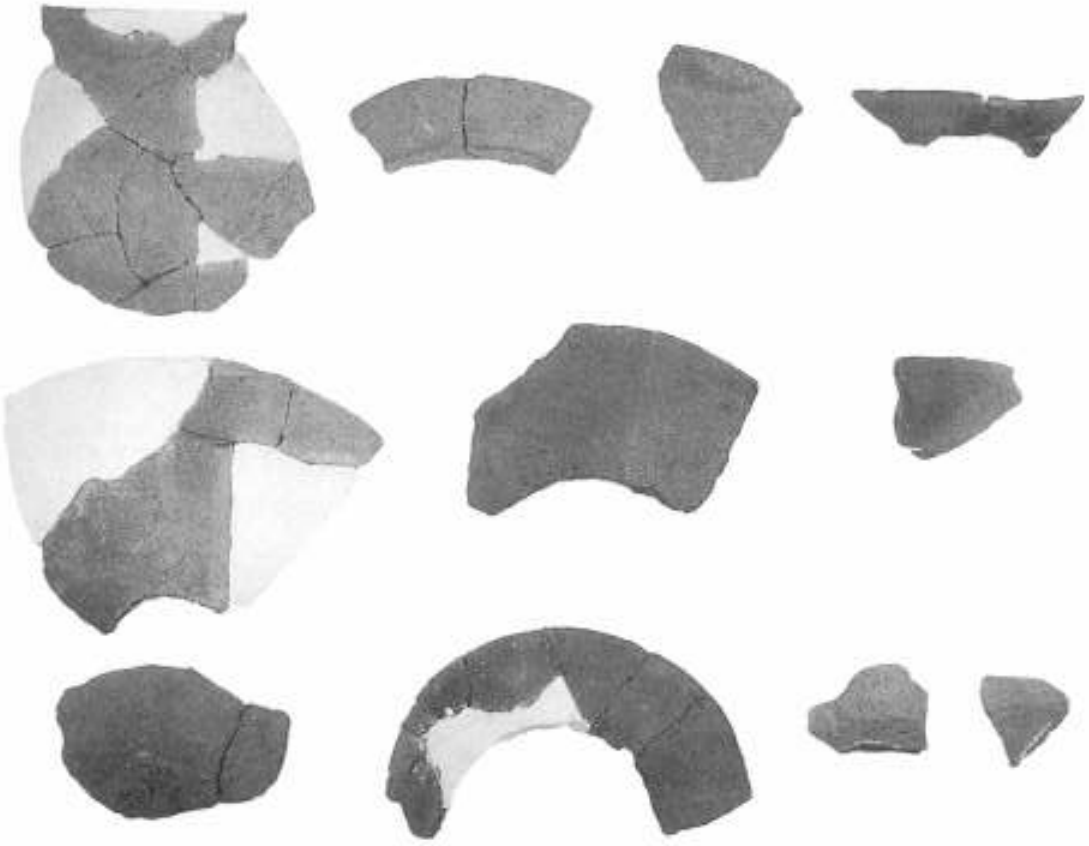


10-2

2．　1号古墳跡周溝・1号溝跡出土遺物

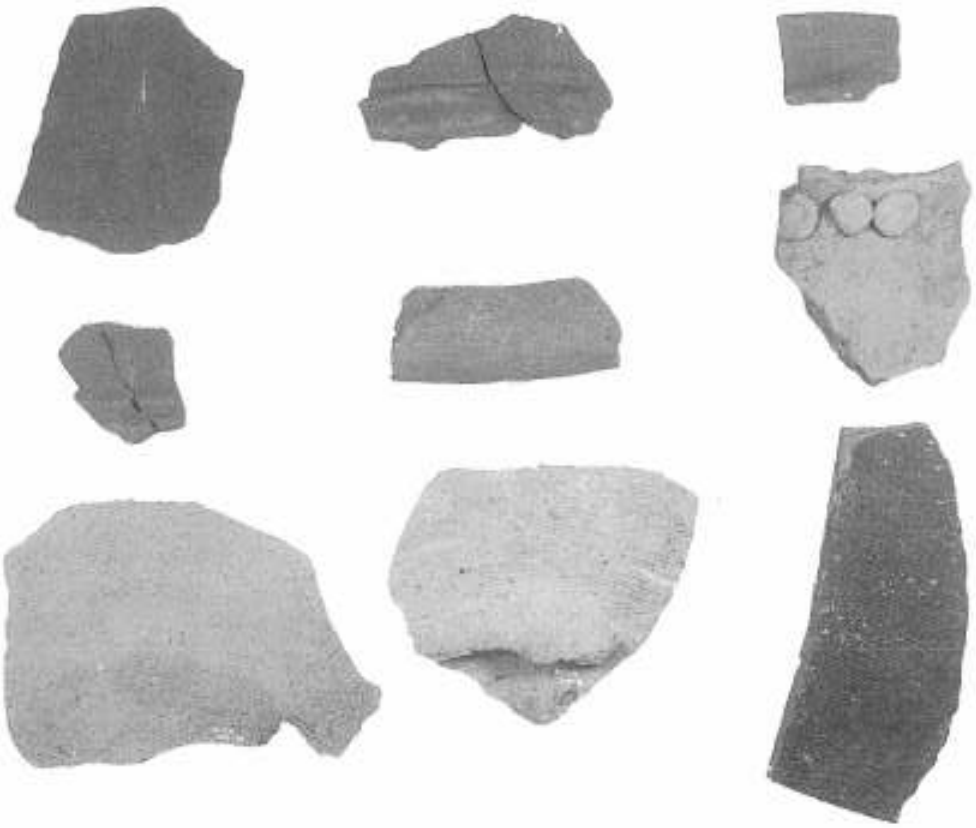


1．　1号古墳跡出土一括遺物

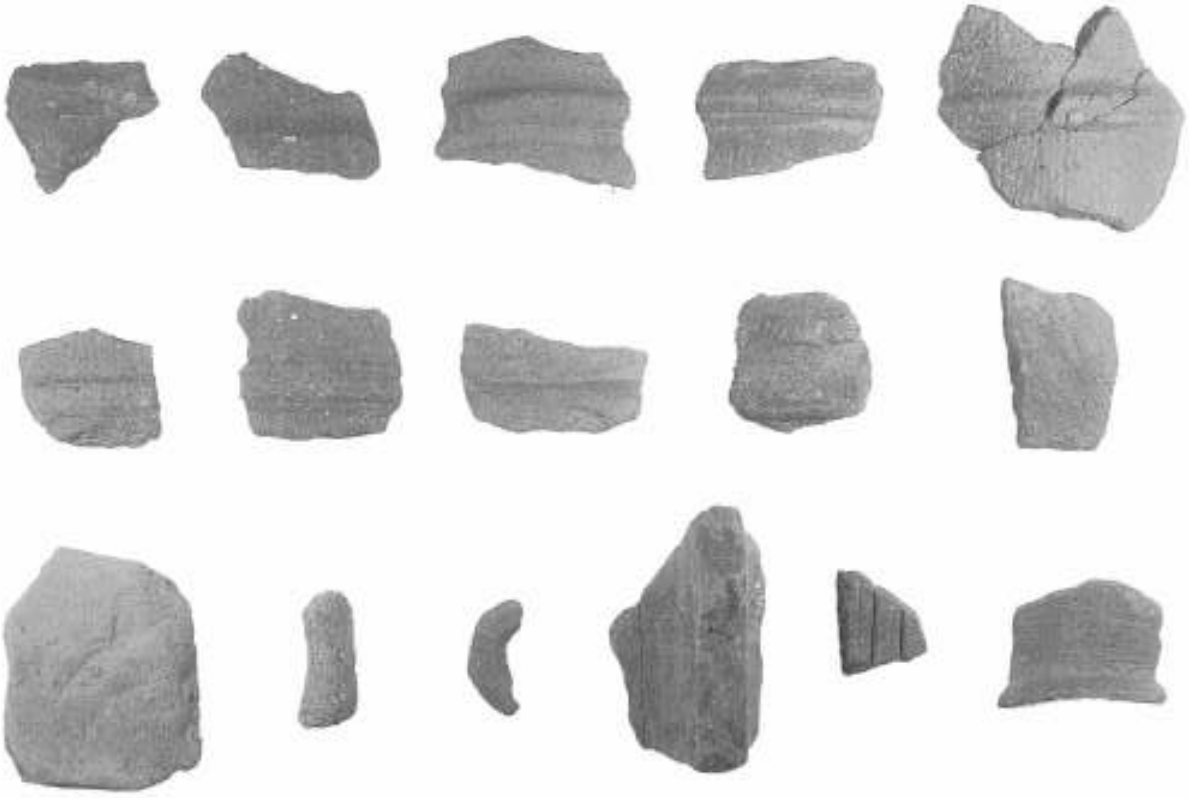


2．　1号溝跡出土遺物

図版 6



1．　2・3号溝跡出土遺物



2．　天神前遺跡出土一括遺物

平成４年３月31日発行

平成３年度　熊谷市埋蔵文化財調査報告書

天　神　前　遺　跡

編集発行　　埼玉県熊谷市教育委員会

印　　刷　　株式会社　博　文　社